



し、15都道府県に広がったとはいえず、まだ30人しかない。だが、医師とのズレを修正するサポートはすでに始まっている。

木下静夫さん(78)は3年前に咽頭がんの手術をし、その後の放射線治療によって、普通に生活できるまで回復していた。しかし昨年、激しい痛みを感じるように、自ら病院へ行つて、「入院して痛みをとってほしい」と訴えた。一人娘の早苗さん(48)は、父がそんな行動を

とつたことに大変驚いた。

「昭和1ヶ月生まれの父は、病院嫌いで相当な痛みがあつても我慢してしまふ人なんです。そんな父が自ら病院に行つたわけですから、相当に痛みはひどかつたんでしょね」

がんは想像以上に進行していた。それがまず最初の「ズレ」だった。さらに、

痛み止めの副作用で、一日中ボーッとした状態が続き、呼吸も困難になってくる。病状はむしろ悪化していった。そんな時に早苗さんは

病院から「冷酷な宣告」を受けると、

「もうできる治療はないので、在宅治療にするかホスピスに行くか、2週間以内で決めてほしいと言つたのです。『出ていけ』とは直接言いませんでしたが、私たちがとつては『強制的な退院勧告』でした」

病院嫌いの父だから、帰れるなら帰してあげたい。しかし早苗さんは地方に住んでいるため、父は年老いた母と2人暮らし。その母

はひどいぜんそくを持ちで、介護をしていたのは実は父の方だった。病気がちの母しかいない家に父を帰すわけにはいかない。ホスピスを調べてみると、説明を聞きにいくだけで1カ月以上待つという。うまく入居できても3カ月以上先になるころしかない。

## 最初に聞くのは 本人の思い

途方に暮れた早苗さんは、以前母が入院していた時に世話になった看護師長の吉田さんに相談した。ちょうど吉田さんがメッセンジャーナースになってすぐの昨年10月のことだった。

「事情を説明した後、吉田さんが最初に言ったことは、『お父さんがどうしたいのかが一番大事だから、まずは本人の意思を確認しましょう』でした」

メッセンジャーナースがまず最初に聞くべきことは、本人がどうしたいかだ。早苗さんは、まだ意識のはつ

きりしている父に聞いた。すると、「一日も早く家には帰りたいが、いまのように一日中ボーッとした状態では帰れない」と答えた。

吉田さんの次のアドバイスは、「在宅やホスピスに行けない家庭の事情をもう一度、はっきりと病院に話してみたら」だった。長年看護師をし、医療現場の事情を熟知しているから言える助言だった。

吉田さんは言う。

「病院にはたくさん規制がありますが、患者さんが希望を伝えれば、できることはやってみようと思う医療者も実はたくさんいます。問題はどうか伝えるかです」

早苗さんは医師や看護師にどうすれば思いが伝わるか、吉田さんにアドバイスを受けた。それが功を奏したのか、病院側は異例にも入院の延長を認めてくれ、早苗さんと医療者との信頼関係は好転していった。半面、静夫さんの病状は急激に悪化していく。気管切開をするかどうかの局面で、

吉田さんは迷わず、「やめた方がいいのでは」と助言した。静夫さんが、何より「話すことが大好き」な人だと知っていたからだ。

静夫さんの病状はさらに悪化し、入院して1カ月後に息をひきとることに。亡くなるまでの10日間、早苗さんはずっと父に付き添った。病院は、2人部屋を貸し切りで使わせてくれた。そこで父の喜びそうなことはなんでもやった。

「亡くなる前日の夜中12時ごろ、父が急に息苦しうなつてきたので、吉田さんに電話したんです。そうしたら『胸をさすってあげて。あなたがさすってあげたら気持ちも落ち着くから』。指示通りにしたら本当に楽になり、その後に孫のビデオを見せると笑顔まで見せて、すーっと眠りについたんです。本当に眠るような安らかな最期でした」

早苗さんに悔いはない。「娘としてやるだけのこと。はできた満足感もありました。吉田さんが父の希望を